

# 外国人との共生

## ■日常の光景

都内のコンビニを利用すると、働いている人のほとんどが外国人であることに気づきます。むしろ、それは当たり前前の光景であり、たまに日本人を見ると違和感を覚えるくらいです。同様に、建設現場やファミレスなどで働いている人を見てもその多くが外国人です。もはや日本の現場は外国人なくしては回らないといった方が正しいのかもしれない。

にかほ市内でも10年ほど前からいろいろな国出身の外国人が暮らすようになっていきます。その数は人口の1%ほどになります。特に最近では東南アジアや南アジアの人が増えています。彼らの多くは、市内の中小企業で技能実習あるいは特定技能として働いている人、あるいは昨年度市内に開校した日本語学校で学んでいる学生たちです。さまざまな言葉、宗教、文化などを背景とする人たちが私たちの周りにも増えてきています。

## ■最近の潮流

外国人技能実習制度の目的は日本企業で学ぶことで途上国へ技術移転を図ることとされています。建前は、です。実際はデフレへの対応策として産業界が求める安価な労働力を確保するためでした。

ところが最近では状況が変わってきています。それまでのような安価な労働力の確保というよりはむしろ人口減少による労働力不足の補充といった、より社会構造上の危機に対処するためのものになっています。それまでの技能実習制度に

「特定技能」制度を新設したり、来年はこの技能実習制度そのものが廃止され、育成就労制度が新設される予定となっているのも外国人に対する向き合い方が大きく変わってきているからだと思っています。

## ■「揺り戻し」

昨年の参院選と今年2月の衆院選で、外国人の急増に警鐘を鳴らし、これを抑制しようとする主張が勢いを増しました。その原因の一つが、外国人インバウンド客の急増によるオーバーツーリズムと彼らの一部によるマナー違反行為がSNS等で拡散されたことにより、外国人に対する忌避感情が日本人の中に広がったことにあります。加えて、昨今の外国人富裕層などによる不動産の活発な取引の動きが日本の安全保障にとって脅威であるといった意識が広まっているのも大きな原因となっています。

今、それまであまり外国人を見ることのなかった地方都市においても、さまざまな国出身の外国人が日常的に見られるようになってきています。この急激な「国際化」に、戸惑い、困惑している地域が各地で増えてきていて、それが外国人に対する忌避感情をもたらしているのだと思います。ゆえに、昨今の外国人の受入れに対する拒否反応は、急激に進んだ外国人の流入に対する「揺り戻し」だと私は感じています。

## ■キーワードは「寛容と包摂」

人間の集団意識の中で度々見られる「揺り戻し」はある意味での社会にとつ

ての安定装置でもあります。ただ今回の外国人に対する対応は、インバウンド客としての外国人、不動産を取引する外国人、労働力としての外国人など、すべての外国人を一緒くたにしてしまっているところに危うさを感じます。

前述したように、政府は産業界からの要請に基づいて急速に外国人労働者の受入れを進めてきました。ただ、本来同時に進めるべきだった地域社会での受入れ態勢づくり、たとえば生活ルールや日本語を学ぶための取組みについてはこれを地方に任せっきりにしてきました。にかほ市でも、技能実習生の皆さんに対する支援をボランティアの方々から協力してもらいながら実施してきましたが、それだつて人的資源や予算面から本来的なところはまだ手が届いていないと正直言えません。

昨年7月、全国知事会では政府に対して、多文化共生の実現に向けて国が主体的に取り組むことを要望した提言書を提出しました。かつて多文化共生の課題は国内の一部地域に限られていました。今は日本全体に広がっています。にかほ市もまさに多文化共生への向き合い方が問われ始めているのです。



にかほ市長  
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。

